

# 法勝寺

## -阿弥陀堂と八角九重塔北側の調査-

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

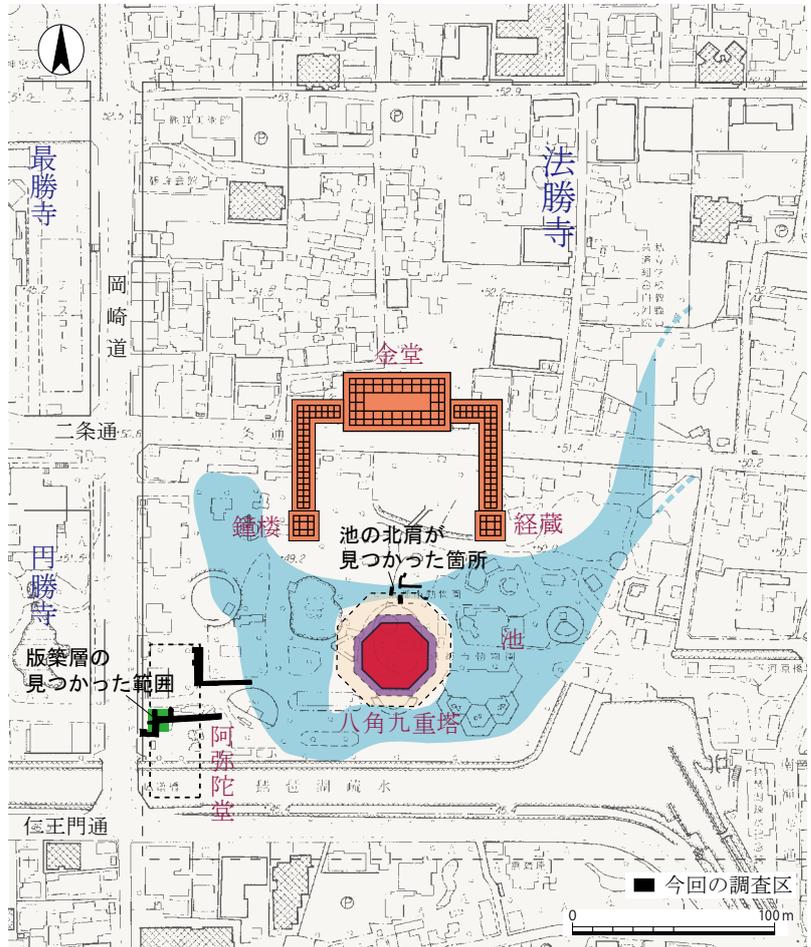
法勝寺は白河天皇の発願によって承保2年(1075)に白河の地(現在の左京区岡崎周辺)に造営が開始された寺院です。法勝寺に続いて「勝」の字が付いた5つの寺院が周辺に建てられたことから、これらは「六勝寺」と総称されています。法勝寺は文献史料などの研究によって伽藍配置の復元がなされていますが、これまでの発掘調査でも池や金堂、八角九重塔などの跡が確認されており、往時の様子がずいぶんわかってきました。

2010年、京都市動物園にある観覧車の南側で八角九重塔の基壇の基礎である掘込地業が見つかり、話題となりました(リーフレット京都No.269・No.270)。

この八角九重塔は、法勝寺の南半にある池の中央の「中島」に建てられたと解釈できる記録があります。しかし実際に塔の周囲を池が囲むかどうかはわかっていませんでした。また、主要伽藍の一つである阿弥陀堂も、塔から池を隔てた西側にあると考えられましたが、これまでその遺構は見つかっていませんでした。この2つの問題を解決するべく、2011年6月から8月にかけて、塔の北側と池を隔てた西側で遺跡の確認調査をしました。

### 塔の北側の調査

塔の北側では、遺構の残存状況は比較的良好な状態で、地表下30cm



法勝寺主要伽藍復元図

程度で法勝寺の遺跡の面に達しました。金堂前面を平坦にならした整地層が北から広がり、塔の中心から北へ20m辺りで南へ大きく下がって池の北肩となっています(写真1)。このことから、池は塔の北側に回り込んでいたことがわかりました。ただ、今回確認した塔の北側の池は後に埋め立てられ、新たに掘込地業が築かれていたことがわかりました(写真2)。池を埋めた土からは、たくさんの瓦が出土しました。

塔の建てられた場所は、当初池が回り込んで独立した「中島」でした。塔は承元2年(1208)5月、落雷によって焼け落ちてしまいましたが、すぐに再建が始められて5年後の建暦3年(1213)に完成します。おそらく、焼け落ちた後、再建に向けて資材の搬入などのために、塔の北側の池が埋められて、金堂の前面と陸続きにされたと思われる。この時に塔の基壇の外周に掘込地業が付加され、基壇の補強が図られたと考えられます。



写真1 塔北側の池の北肩検出状況（東から）



写真2 塔基壇の掘込地業と池埋め立て土（西から）



写真3 阿弥陀堂跡基壇と思われる版築層（東から）

## 塔の西側の調査

池を隔てた塔の西側では、全体が戦後に平らに整地され、遺構の残存状況はあまり良くありませんでした。調査区の東端では、池の西肩を確認しました。この辺りは、寺域の南西角へ向けて、元の地形が緩やかに下がっているのですが、法勝寺造営時に平坦にするために施された整地層が、南西側ほど厚く盛られていました。その整地層上面のやや低くなった部分に、粘質土・砂質土・小礫を入れた粘質土などを、5 cm から 10cm の厚さで交互に水平に積んで叩き締めた版築層を確認しました（写真3）。版築層は途切れてはいますが、東西 10.5 m、南北 9.5 m の範囲に確認できました。最も残りの良い場所で厚さ 30cm ほどありました。池の西肩からは、西へ 35 m の地点にあたります。

これらの遺構は、見つかった位置からみて阿弥陀堂の基壇の版築である可能性が高いと考えられます。文献史料などの検討から、阿弥陀堂は九体の阿弥陀仏を納める東西二間、南北十一間の身舎の四面に庇・孫庇が巡り、さらに南に五間以上の廊が附属する長大な南北建物が想定されています。

この建物の土台となる基壇は、さらにひと回り大きいものと考えられますので、今回見つかった版築層はごく一部ということになります。しかし、少なくともその一部とみられる版築層が見つかったことは、推定されていた阿弥陀堂の位置を裏付ける成果と評価できます。

（高橋 潔）